



ADULT ONLY

ベラドonna

Belladonna

最悪の日が続く……

そんな時少年は

ミヤギという友人を得た。

そして、この日から

彼の心の中に、

からだの中に、

何かが激しく燃え上ったノ





何...!? ...アハハ

八千代ちゃんか
クエーサーの魔法で

おちんちん...
は...アハハハ...
アハハハ...

アハハ

アハハ

お...アハ
アハ...

なんだが...
なんだが...
私...!!



あー

おーいおーい...
ハイハイ...
おーいおーい...
おーいおーい...
おーいおーい...

あーあー...

あーあー...

あーあーあーあー...
あーあーあーあー...
あーあーあーあー...
あーあーあーあー...

あーあーあーあー...

あーあーあーあー...
あーあーあーあー...
あーあーあーあー...



ああ、
なんか...
もあ...!!!

は、は、は、あ、あ、あ、
な、なんか...来たま

ああ、う

ああ、



あ、あ、あ、
も、も、も、
ごええええ、

チノ、チノ、
チノ、チノ、
チノ、チノ、

チノ、チノ、
チノ、チノ、

チノ、チノ、
チノ、チノ、

あ、あ、あ、
あ、あ、あ、
あ、あ、あ、

おちんちん、
おちんちん、
おちんちん、

おちんちん、
おちんちん、
おちんちん、
お汁が射撃するよ、

チノ、チノ、
チノ、チノ、
チノ、チノ、

キザッ...キザッ...
キザッ...キザッ...
キザッ...キザッ...



!!?
イェッ?

ワッ

ほな



ああッ
だ見なッ

ブル

おっお願!!
そんなに見られた
私...私...!!

ブル

おん



止まんない!!
ああッ

はあ...
はあ...

キザ

キザ

キザ

ま...ま...
ま...ま...

ま...ま...
ま...ま...

セ...
セ...
セ...
セ...
セ...
セ...
セ...
セ...
セ...
セ...

あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...

これ

これ

あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...

あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...

あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...

あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...
あ...あ...





誰か
助けて...

はー
はー

はー



だめ... トロフィー
何回しても
おのれに...



はー

はー
はー



おは



「ヒィー」
「ああん」
「ほたる」と
「ほたる」と穴賭けて

わたん?

勝負ハ
ウウウ

!!!

はッ

はッ

はッ

わたん



「ほたる」

「はッ」
「はッ」
「はッ」

再星



アッアッアッ

アッアッアッ

アッアッアッ...
アッアッアッ

アッアッアッ...
アッアッアッ

アッアッアッ

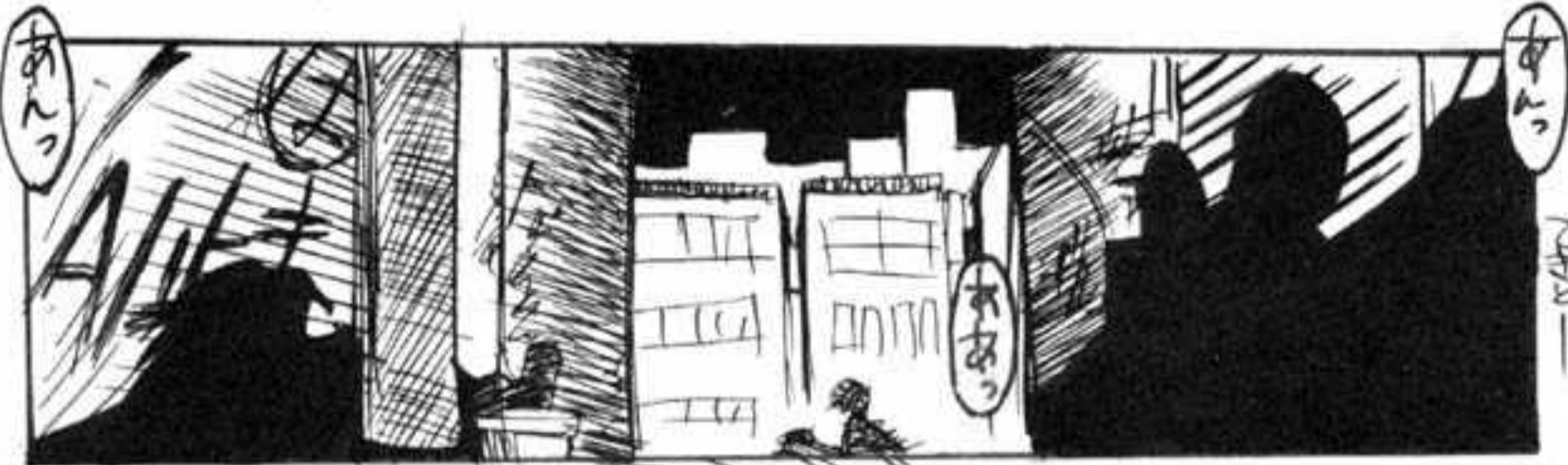
アッアッアッ

アッアッアッ

アッアッアッ...
アッアッアッ

アッアッアッ...
アッアッアッ
アッアッアッ
アッアッアッ

アッアッアッ...
アッアッアッ





まほう...
 しょうご...
 シェッ
 シェニー
 士ああん
 シェニーせん
 大好きだよまお
 おあっちゃっ

まほう



まほう♡
 のちほたけん
 おなわ

まほう

へなちよこ
落書きです〜



■ボツ原。
7・3分けの
ほたりゆん (笑)

HOTARU★Cat



■ネコ着ぐるみを着た
ほたほた……って、
コレほんとにほたる
のつもりで描いたの
かなあ!?
キオクがアイマイ…。



■Vサインー
ほたほたは
元気で健気が
信条だツ☆



■HPにものってた
ほたりゅん。
かなり初期です。
あうあう。

HOTARU

HOTARU



ANALFUCK

「……長いって（笑）
オムツだし～……
絵的に訥漫かもねえ」

■お尻にずっぶし～。
うしろからされるのは
こわくてキライです～
ってカンジ？



MEMAPHRODITE

■なんでもない
ポーズ。
いろんなトコが
長くてあらあらまあまあ。



■コギヤほた(笑)
下半身切れちゃって
ルーズソックス
描けなかったよ〜...
次回にチャッレーンジ!



「ここまでジエニーが心を奪われたなんて、ひよつとしたら初めてかもしれない。」

双葉ほたる。「自分より年下の彼女に、ジエニーは恋をしてしまった。」

初恋じゃない。

でも、初恋のようにそれは鮮烈で、背筋がソクソクするほどの恋。

定から顔を出し長い金髪を掃き上げて下を見ると、道路を歩く少女の姿が見えた。

「ほたる……」

黒髪の少女は元氣よく軽快なステップを踏んで駆け回り、その仕草の1つ1つがジエニーを引きつける。

ベットであるテンとじゃれ合い屈託無く笑う笑顔。キラキラと太陽の光を反射して輝く黒髪。

「あはっ、イトカツ☆」

ほたるがイトカツと呼んだテンに類ずりするとイトカツはべろりとほたるの頬を舐めて答える。

「イトカツっていうのか……いいいなあ……ほたるにあんなにくっついて……はあ……うらやまし……」

出るのは溜息ばかり。

「どうしようかな、どうしようかなあ……」

告白はしたい。

でも、好きだという気持ちが大きいため、もし嫌われたときのことを考えると勇気が出ない。

あと一押し。一押しでいいのだ。背中をポンと、押して欲しい。

「ほたる……う……」
ソクソクと背筋に走る感覚……。性欲がまたジエニーを支配し始めるのだ。

「また……ほたる……のね……オカズにしちゃう……」

ただひらひらと脚線美を覆っているだけのスカートに抑制力など無く、股間がゆっくりと隆起し始めてきた。

「立つちゃう……」
指でなぞりスカートの上から軽く掴んで下にしごくこと、いつも通りに快楽が流れ込んで来る。

しかし、いつも通りではあるが、それは飽きることのない快楽である。

「ほたるっ、ほたるっ、ほたるっ……！
あっ……はあ……」

スカートを持ち上げてペニスを露出させるとそれがかなりの大きさを持っていることが見て取れた。

胸近くまで勃起し、赤黒く凶悪なそれは肉の塊と呼ぶに相応しい。

肉感的な身体を覆わせながらジエニーは両手でそのペニスをつかみ、一心不乱にしごき上げて自分自身の肉体を食った。

「うああ……っはあ……いい……」

「うああ……」
眼下には無邪気なほたるの姿。

まさか自分が自慰の対象にされているとも知らず、街路樹の木陰に盛り込んでひなたぼっつ。

イトカツを胸に抱いて少し眼そくに、そして

「ほたるかわいいよお……ごめんね、ほたるっ……ジエニーね、ほたるのオカズにしてるのっ、ほたる見てオナニーしてるのっ、ほたる見ながらチンポしごいてるのっ！」

好きな人を汚してしまうような行為は常に罪悪感がつきまとうのだが、ジエニーの股間から鎌首をもたげるペニスはそれすらも快感へと交換する魔力を持っていた。

背徳の感覚がジエニーを絶頂へと押し上げる。

「はあ、あれ、あれえ……」

片手でペニスをしごきながらジエニーは小物入れの引き出しを開け、ローションの瓶を片手に持ち出した。

冷たく粘力の強い液体をペニスの頂上からふりかけて、しばらく流れ落ちていく様子を見守る。

「冷たあい……んう……ん……」
日光が反射して光り輝くローション。

「ふえふう……チンポがドロドロだよお……」

全身鏡に映る自分の姿は、たまたまなく卑猥で、美しい。

持て余し気味の胸。そして巨大なペニス。粘液の光沢でドレスアップされて自分自身の姿にすら興奮を覚えてしまふ。

「ひやはっ……ぬるぬるなのお、好き……ローションでぬるぬる……」

ほたるう……ローションでぬるぬるるう……

「ちゅぶっ……ちゅぶりっ……」

「両手で掴んでも随分と冷るベニスを上下に
つじけ始めぬ。」

「気持ちいい……お……お……お……
あー……熱いのう……ローション
が冷たいのに、チンポが燙く熱いのう……
ひゅ……ひゅ……ひゅ……」

自分の醜いベニス姿と、清らかなほたるの
対比がより一層ジエニーを燃えさせ、上下に
動く両手はさらに激しく、速度を増した。

「あーっ、あーっ……いくつ、
いくつ、いくつ……ほたるうう……
チンポお、ジエニーのチンポをしゃぶつ
てえ、しゃぶってえっ……入れさせ
てえっ……」

「ひゅ……ひゅ……ひゅ……ひゅ……
はっ……はっ……はっ……
先づから飛び散る白い液体はジエニー自身
を蹂躪して、彼女を粘液の虜にする。」

「ふあんっ……ひゅ……ひゅ……ひゅ……
んっ……ひゅ……ひゅ……ひゅ……
ん……んっ……んっ……んっ……
精液が排出される度にがくと腰の力が抜
けてジエニーは壁にもたれ掛かった。

絶倫ベニスは羨えることを知らないのでも
まだまだいくらでも射精できるのだが、キリが
無いために手を放し、くのを止める。
それでも射精は収まらず、勢いのない精液
が下口と先端から床へと流れ落ちた。
「だめだよ……我慢できないよ……
ほたるう……ちんぽがおかしくなっ
う……」

「ちんぽ……ちんぽ……ちんぽ……私もう、この
チンポもう、ほたるが欲しくて溜まらな
いよ……」

自分の臍頭を指でなぞって精液をすくって
口に運ぶジエニー。

「ほたるのセーエキも美味しいのかな……
吸いたいたいよ……」

肌についた精液も全てすく取ったジエ
ニーは勃起が収まるのを待って、部屋を出
た。

「今ならまだほたるがいる。」

もう、気持ちを抑える事なんて自分には無
理だと思ったから、ゆっくりと階段を降り
て、重い足取りで扉を開けた。

瞬間、ジエニーを祝福してか、その逆なの
か、風が吹き抜けて髪が一瞬、宙に舞い上
がる。

その風にはほたるも吹かれ、顔を上げる。

二人の目と目がある、ジエニーは目を遠ら
せずその場に固まり、ほたるはキョトンとし
た顔でそんなジエニーを見つめる。

「はた……はた……はた……」
思わずほたるの名前を呟いてしまう。
変に思われないだろうか、私がほたるを
知っていてもほたるはジエニーという名を知
らないのと同じ、最後は小さく聞き取れ
ないくらいの声になってしまったが。

「はっ……はっ……はっ……」
揺れ動く大きな胸を左手で押さえると心臓
の動悸が手にまで伝わってきて、胸が苦し
い。
息をゆっくりと吐き出すのが精一杯で次に

何を言えいいのか頭が真っ白になって。
自分はこのなんにも勇気がないのかと、呆れ
てしまう。

「目の前の少女に一言好きって言えはいいだ
けなのに、それだけなのに、出来ない。」

「ふえ？」
ほたるはジエニーを不思議そうに見つめ
た。

自分より年上で自分より綺麗なお姉さんが
切なそうな目で「っ」を見ているというのは
何となく非日常的で、おかしい気分だ。で
も、不快ではない。

「……め、め、め、め、め、目障り
なのよっ、その庭から見ただけど、街の美
観を損ねるわっ！ 近くに住んでいる私の事
も考えなさいっ」

ジエニーの口からやっつと絞り出された言葉
は彼女が言いたかった事とは全くの正反対
で、自分自身の性格をジエニーは初めて嫌悪
した。

どうして、素直になれないんだらう、と。
本当は、今すぐいでも目の前の少女を抱き
しめてあげたいのよっ。

「う……う……う……」
いきなりそんな事を言われても、と、不満
そうな表情でジエニーを見つめるほたるの目
が語っていた。

「それも当然だろう。悪いのはジエニーであ
り、本人もそれを良く解っているのだから。
「ふんっ、まったく、ムカつくわっ！ 私の
名前はジエニー。私と勝負しなさい
よっ、双葉ほたるっ！」

少し上乗った声だが、ほたるはそれを怒っ

ているせいでと了解した。

勿論そうではなく、ほたるに自分の名前を告げてしまった事に対しての緊張感に負けてしまっているだけだが。

「ふええ?? 私の名前知ってるの??」

綺麗なお姉さんが自分を知っているという事に驚き、ほたるも胸がどきどきと高鳴っていた。でも、表面上とはいえジエニーは怒ってるのだから喜ぶべき事ではない。

だがそれが緊張感の低いほたるらしく、可愛くはある。

「ふん、勝ったらあなたの言うことをなんでも聞いてあげるーでも、私が勝ったらあなたに言うことを聞いてもらうわ」

「そ、そそそそんな急に」

「あらち、怖いのか? 逃げちゃうの、いいわよ、いいわよ、闘虫ほたるちゃん」

ジエニーはわざと、ほたるを挑発する。真つ直ぐな性格のほたるならば、挑発されれば乗ってくると思っていたし、実際、

「むふふふ、むかっ、ほ、ほたる、闘虫じゃないもんっ!」

乗ってきたのである。顔を赤くして怒るほたるにジエニーは心の中で何度も「ごめんね、ごめんね」と謝っているのだが、そんな事をほたるは知る由も無い。

「じゃあ、そーいう事でOKネ☆」

ジエニーは笑顔で応え、身構えた。戦う前にもう一度、ほたるに謝りながら、

「ふふふつ……ま、結構強かつ

たわよアナタ……でも、私と闘っちゃったのはちょっと無謀だったかもね」

ジエニーの部屋の中、彼女の瞳がほたるの身体を舐めるように見つめる。

その目は既にどう料理するか考えている目で、ほたるの裸を想像し、視察していた。

「約束は解ってるわよね?」

2人は、「勝った方が言う事を聞く」という条件の下に戦い、そして経戦が多い分一枚上手なジエニーが勝ったのだった。

「はい……解ってます」

抵抗する気も無いらしく、ほたるはしゃがみこんだまま上目遣いにジエニーを見あげた。

潤んだ清らかな瞳がジエニーの琴線に触れる。

「ふふ……うふうふ……いいわ、その顔……そそっちゃうわ……何をしてもいいんだよね……うふ、うふうふ……」

ソクソクと身体を震わせ、自分の両腕を抱きながらほたるを視察しつつけるジエニーの瞳にはあらゆるポーズ、あらゆるシチュエーションでほたるを犯している場面が写っている事だろう。

「ほえ? こ、こわいよう……」

「ほたるう……可愛い……」

ほたるはジエニーの言葉に視線を下に落として、頬を朱に染めた。

「本当に何しても、いいんだよ……ね?」

ほたるの顔に自分の顔を近づけ、朱に染まったお互いの顔がくっつくのではないかと

いう程近づいてジエニーは囁いた。

「……はい」

「ほんとに?」

「……はい」

「真つ赤なお顔、可愛い」

そう言うジエニーもほたるに負けず劣らず、真つ赤な顔を見せている。

「もう、お姉さんがイイコト教えてあげちゃうよ」

「……はい……」

ほたるの大きく輝く瞳がジエニーの瞳を捕らえて離さない。

取ずかしさと期待に全身まで真つ赤になつて、少女とは思えない、切なげな表情を見せてる。

それは何をされるか解っているからこそその表情と見ている。

「そう、なら、話が早いわ……さつきからココが動揺して仕方が無かったのよ……闘う前からずつとね……これだけ大きいと腫すのが大変だわ……ふふ……ふふふふ」

スリットの入ったスカートを指で軽くなぞりあげると、炎死に抑えていた欲望が浮き上がる。

クッキリと形を浮かび上がらせる肉の塊。

「さあ、これに……事仕しなさい……まず、そうね……お口かしら?」

ジエニーが両手でスリットスカートの端を掴んで上へ捲り上げ、純白の下着から大きくはみ出した長く太く、そして赤黒いペニスを誘示すると、ほたるはゆっくりとそれに顔を

近づける。

両手でジエニーの愛液の染み込んだパンティをゆつくりと引き下げ、彼女の肉体と下着を繋ぐ愛液の糸を舌で舐め取るほたる。下着自体にも口を付け、愛液を吸うと今度はその愛液を流すジエニー自身へと口をつけた。

「ちゅうう……うん……」

「んっ……！ きうう……！」

真つ先にペニスを奉仕するだろうと思っていたジエニーは予想外の攻撃に驚き、思わず甲高いあえぎを漏らしてしまう。

捲り上げたスリットスカートの下でほたるは動いているため、何をされているのか見えず、ジエニーの鼓動は高まる一方だ。

「うふふ、大きいでしょ？ ここまで大きい娘もなかなかいないでしょう？ その小さいお口で隅々まで奉仕するのよ」

「はい……ジエニーさん」

極めて従順にほたるは答える。年下の少女に奉仕させている事を考えると、ジエニーのペニスはより多く愛液を垂れ流した。

「ベロ……るるるるる……」

ジエニーの期待に応えるかの如く生暖かい舌は根元から先端までを一気に舐め上げる。

「うっ……！ はあ……」

ほたるの小さな舌が自分のペニスの上を這

いまわっている想像するだけで興奮する。あの小さなお口から、ちろちろと細い舌を出して……

「……こんな可愛い少女を……なんて自分は罪深いのだとジエニーは思った。」

「んっ……んふう」

愛液を噴き出している亀頭に舌を這わせ、次々と愛液を吸い取って行くほたる。

「美味……くすっ……」

もつと……淫靡な笑みを浮かべて小さく呟いたその言葉はジエニーには聞こえない。

「ひちゃ……じゆるっ……」

純真そうな顔をしながら繰り出す舌技は巧みで、ジエニーの表情が見るうちに薄けて行くのが解る。

「ああ……あ……ほたるう、そこ……もつと舌を使って……」

「う、もつと……」

「はあい、ジエニーさん」

ほたるの顔に先程よりも妖しい笑みが浮かび、今度は口を大きく開けてジエニーの亀頭を口に含んで舌で舐め始める。

「うあ……はあ……」

「んぐっ……んぐう……」

「いいよ、ほたるう……！ そう、これ……これがいいのっ……ほたるの小さなお口、私のペニスでいっぱいでしょう……？ うふ……お口の中にあたしの熱いチンポがいつぱいだなんて……やはあ……」

ほたるの口を征服する喜びに酔いしれる

ジエニー。

だが、事実は少し違っていた。ほたるは亀頭をしばらく舐めまわすと、今度はさらに奥までペニスを口へ入れていったのだ。

「ずる……ずるり。」

喉までペニスを咥え込み、根元までほたるはジエニーのペニスを飲み込んでしまった。

「そう……征服されたのはジエニーのペニスの方なのである。」

「う、うそ……あ、あたしのペニスが根元まで……！ こ、こんな初めで……！……！……」

「……こんなに、こんなに大きなチンポなのに……全部、全部……全部飲み込まれちゃうなんて……」

「んぐう……んぐう……おつきい……よお……」

「ずるっ……ずるりっ……」

息苦しいのだが、感じているジエニーの顔が可愛いのでほたるは限界までペニスを吸い込んだ。

「ああああ……ペニスが、ペニスが……あたしのペニスが喉の奥まで入ってるうう……いい……いい……」

「いいよ……喉の奥の奥に亀頭が当たるウー……さきつぽから、根本までっ、つつま

れてっ……きう……」

まさかこんな事の出来る娘だとは思わなかったため、ほたるの意外な技にジエニーは

「……」

「……」

「……ちゅほんっ。一度口から引き抜くとまた喉の奥までペニ

スを飲み込み、それを何度も繰り返す。

「うっはあああー！ ディープスロートなんてえ．．．初めて．．．初めてだよ．．．チンポが気持ちいい．．．はあく．．．奥までえ、根本までえ．．．イイ．．．イッ！ いいよおおっ！ 大きいチンポが全部支配されちゃうっ！ ほたあ、ほたるううっ！」

スリットを上まで引き上げ、スカートの端を口にくわえたジエニーは空いた両手でほたるの頭を掴み、前後に激しく揺さぶった。

何度も何度もベニス全体を搾られ、ほたるの奉仕を受けるジエニー。

快楽に溺れる声をスカートを噛み締める事で必死に抑えているようにも見える。

「んうう、んふうう．．．んふうう．．．ん

根元まで飲み込まれる初めての経験に腫からは涙を流し、口にくわえたスカートには流れる唾液が染み込んでいく。

「うぶっ．．．んぐむう．．．ジエニーさんのベニス、とつても美味しい．．．くすくすっ．．．おつきくて．．．熱くて．．．んっ．．．もつと、もつと気持ちよくなつてくださあい．．．」

喉の奥で雁首を締め上げて強くしゃくくと、ジエニーのベニスは一気に爆発まで上り詰めていった。

「うあっ．．．うあっあああ！ ペニスがあっ、射精するうっ．．．射精、射精、射精、射撃いいっ、セーキいっばい喉の奥に流し込ませてえええっ！ 精液どくどく流し込むっ！」

どぶっ．．．どぶびゅるとどぶどぶ．．．びゅるとどぶっ．．．

初めての経験にジエニーの尿道はいつもよりもずっと大きく広がり、大量の精液をほたるの喉へと噴出させた。

精液の塊が尿道を通る度にベニスが歓喜にむせび泣く。

普段から激しく大量に射精しているジエニーがいつもよりずっと大量に射精したにも関わらず、ほたるの口はその精液を一滴も奪す事無く飲み干していった。

「ふはああ．．．はふっ．．．きもひいい．．．ほたりゅう．．．ふひっ．．．のんでくれてるう．．．お口の中、私のチンポとセーキでいっぱいなのいい．．．ひんっ．．．」

激しくほたるの頭を動かしていた両手も次第に速度を緩め、口に咥えていたスカートもゆつくりと下へ垂れ下がった。

自分のベニスを根元まで飲み込んだというのはほたるが初めてなら、一滴も奪さず精液を飲み干したのもほたるが初めてであり、意外な才能を持つほたるにジエニーは驚く。

「はああ．．．凄いいじゃない．．．気に入ったわよ、ほたる．．．そんな可愛い顔して．．．うふっ．．．いやらし

いんだから．．．もう．．．燃えちゃうわよ．．．私のチンポ、歯止めが利かなくなっちゃうわよあ．．．」

そう言っている間もほたるはジエニーのベニスを舐め続けている。

本当に一滴も精液を残さない。

「美味しい．．．ジエニーさんの精液、美味い．．．」

鈴口に唇をつけ、強く吸いたると尿道に残っていた精液が吸い出され、ほたるはそれをゆつくりと舌で味わう。

「きゅっ．．．す、吸っちゃ駄目え．．．いっぱい出ちゃうよ．．．んうっ！ 溜まった精液があっ．．．奥から．．．はああ、さきっぱまで来てえ．．．出るう、でるうっ！」

ドクッ．．．ドク．．．吸引の刺激に、愛液を垂れ流すジエニー。最早巨根のベニスは完全にほたるの玩具と化しており、生かすも殺すも生殺しにするもほたる次第だろっ。

「あん、こんなに愛液がドクドク出てるう．．．んんっ．．．ちゅう．．．もつと吸っちゃいますよあ」

ジエニーは絶頂を迎えたばかりで敏感だというのにベニス休ませず、自分を責かした綺麗なお姉さんへの、ほたるの、可愛いイタスラ。

ちゅうううう．．．吸えば吸うほど鈴口からは粘液が流れ込み、ほたるの舌を染ませる。

ドク．．．ドクドクドク．．．「はひゃっ．．．あうっ、あうっ．．．だめ、そんなに吸ったら．．．また、で．．．るう！ でるのっ、でるのうっ．．．チンポがいきまくるのおっ！

巨根が、チンポがああ．．．」

びゆる．．．びゆるびゆる

ぶうつ．．．！
大量の愛液と、それ以上の精液を射精する
ジェニー。

愛液と精液の程よく混じった半透明の液体
がほたるを喜ばせ、もつと吸いたいと要求さ
せた。

「んふう．．．嬉しいっ、ジェ
ニーさん、精液いっぱい．．．くすっ」

子悪魔のようにジェニーに向かつて微笑む
と、またほたるはペニスにむしゃぶりつく。
「う、うう．．．」

ジェニーはなんだか複雑な気分だった。

清らかで、純真な可愛い女の子だとばかり
思っていたのに、ここまで淫乱でテクニシャ
ンだとは。

悲しい反面、勿論嬉しくも有り、プラスマ
イナスで考えれば結局、目の前で自分のペニ
スを美味しそうにしゃぶる可愛い娘がほたる
である限りどっちでも良い感じだろう。純真
な天使も淫靡な子悪魔も甲乙つけがたい。
何よりも恋人にしたいという気持ちはずつ
たく変わっていないのがその証拠だ。

「ジェニーさん．．．くすくすっ．．．」
ほたるは甘えた声を上げジェニーの太腿を

片腕に抱き、ペニスを舐め上げながらもう片
方の手をジェニーの尻へと滑り込ませ、アヌ
スの入口を指でこね回した。

「ひゃあっ．．．！　ちよっ
とお．．．おしりなんてっ．．．んっ．．．
だめっ．．．」

アヌスを刺激され、ジェニーはまたペニス
から愛液を垂れ流す。

ドクドクと流れ出る愛液の量でジェニーが
どれだけ感じているかがほたるにも手に取る
ように解り、それによつてよりジェニーの劣
勢が浮き彫りにされていくのだ。

「あん、また愛液が溢れて来たあ．．．嬉
しいっ．．．吸っちゃうよおっ．．．」
巨根の先端からドクドクと肉棒を信つて重
カのまま流れ落ちる愛液をペニスの根元で受
け止め音を立てて舐めるほたる。

尻をこねまわす指はその間にも少しづつ奥
へと入り込み、外側から次第に内部を激しく
かき回し始める。

「うああっ．．．ほたる、だめ、お尻
はっ．．．ま、また出ちゃうっ、
出ちゃうよっ！　おしりっダメなのっ、弱い
のっ、おしりっ、指っ、ダメなのっ、だ
めだめだめえっ」

「遠慮しないでいっただして下さい☆
いっばい、ジェニーさんの熱くて白い精液
いっばい☆」

ジェニーのペニスはまた射精寸前まで快楽
を押し上げられ、更にほたるが意地悪にアヌ
スを責める指をもう1本増やすと、虫の息
だったペニスは完全に止めを刺され、精液を
解き放つ。

「おっ、おうっ．．．かきまわさないでっ。
チンポおっ、おしりっ！　おしりチン
ポおおっ！　あはああああっっっ」

「どぶっ．．．びゅばっ．．．びゆる
びゅばっ．．．」

「あはあああっ．．．出てるっ、
精液出てるっ．．．」

白く濁った精液が放物線を描いて飛び散

り、それを顔に浴びたほたるは恍惚とした表
情で顔に付いた精液を指で引き伸ばす。

「えへへ、私の顔にいっばい．．．熱くて、ぬるぬるっ．．．ジェニーさん
の熱いせーえきい☆」

満足そうに微笑むほたるはまたジェニーの
ペニスに唇を付けて吸いたてる。

「ひゃううう．．．ほた．．．ほ
たあ．．．」

「体中がジェニーさんの精液で熱くなる
の．．．ジェニーさん、今度はお腹に
直接精液下さあ．．．」
ほたるは少し恥ずかしそうに服を脱ぎ始
め、その裸身をさらす。

ジェニーと比べれば貧弱といわれても仕方
ない身体だが、それは決してマイナスの印象
を与える物ではなく彼女の可愛さを強調する
ものであり、胸や尻、そしてペニスがジェ
ニーより小さからといってほたるが外見的に
劣るという訳ではない。

なによりそれは射精し過ぎて半萎えだった
ジェニーのペニスがまた固く力強くそそり
立った事を見れば明らかだ。
「かわいい．．．」
と、思わずジェニーは唖いてしまった。
「やっばり、自分の見込んだ通りの可愛い天
使だ。」

露出度の低い服に包まれていた小さな身体
は、傷1つ無く、飾っておきたいと思わせる
ほど無垢だ。

「ジェニーさんも脱いで下さい」
「う、うん．．．」

ほたるが自分の言う事を聞くのではなかつ



たのかと思いながらもジェニーは泣々とほたるの言った通りに服を脱ぎ始める。

どちらにせよほたるを自分のペニスで犯せるのだから少し位我慢しなくては、と。

思いを遂げられないよりは、こうして思いを遂げられるのだから、ずっと、いい。

服を全て脱ぎ終わったジェニーは、ほたるとは違いはちきれそうな程に豊満な身体を見せ付けるように晒した。

「わあ．．．いいな、大きいおっぱい．．．歩くだけでたぶたぶ揺れちゃうんだ．．．いいな、いいなーっ．．．」

人差し指を口に咥えた羨ましそうな表情の視線が、豊満な肉体に効く付けになつてしまっている。

「ふふっ、いいでしょ？ 揉んでみる？ すっごく柔らかいわよ．．．巨根ペニスだけじゃなくて胸だつてお尻だつて、ゼーンぶ自慢なんだから」

「あん、もう☆ 言われなくても☆」

張りのある大きな胸に顔を埋め、顔全体でその大きさと柔らかさを体感するほたる。

ほたるの顔に付着していた精液がジェニーの胸にも纏わり付き、ローションでマッサー

ジされているかのような感覚が二人に伝わった。

「おっぱい柔らかいわ．．．へへ、おっぱい、おっぱい．．．ふにゅふにゅしてると、う．．．気持ちいいよおっ．．．」

「あーん、もうっ．．．私の胸、そんなに気持ちいい？ ほたるう．．．可愛

い．．．」

子供のようになやられるほたるを見てジェニーは可愛いと思うが、その可愛い顔の下にある淫乱なほたるがそんなジェニーを狙う。

ほたるがジェニーの乳首を口に含んで甘噛みし、舌で舐め始める。それが良く解る。

巧みな舌技は天性の才能もあるのだろうが、それと同じくらいに「慣れている」という感覚の方が強く、ひよつとしたらジェニーよりも経験が豊富なかもしれないと思わせるほどのテクニクだ。

「んくっ．．．んう．．．う、上手い．．．よお．．．勃起した乳首がピンピンに感じるよっ．．．舌と唇でコロコロしててえ．．．してしてえ．．．はあうう．．．コロコロい．．．そう、そう．．．そうなの．．．いっぱい吸われてるう．．．おっぱい．．．吸われてるよお」

「だあって、ジェニーさんのおっぱい、とっても美味しいんだもん．．．くすくすっ．．．ジェニーさあん．．．☆」

悪戯っぽく笑うほたる。

これで全部許してしまうのだから、可愛いというのには卑怯だ。

「全く．．．清らかで可愛い娘だと思つたのに、とんだ淫乱だわね．．．この自慢のチンポでお仕置きしてあげるわよお．．．」

「きゃあ☆」

ジェニーにはペニスでなら勝てるという自信があった。

確かにほたるの口内で何度も射精させられてしまったが、このペニスは今まで何人もの

熟練した女達を落とすとして来た自慢のペニスなのである。

大きさを言えば、ジェニーに勝てる大きさをもつ者は少ないだろう。

少なくともジェニーは自分より大きなペニスを持つ者に出会っていないのだから、その大きさは相当なものだ。

少しだけ小生意気な態度を取るほたるだつてこれでヒィヒィ言わせてあげる．．．と、ジェニーの頭の中ではこの後の展開が既に出来上がっていた。

「どっちに入れて欲しい？ 好きな方に入れてあげるわ」

「え．．．あ．．．じゃあ、うーんと．．．お尻に．．．お願いします．．．」

ほたるは四つん這いになつてジェニーに尻を向けた。

「あう．．．」

少しは恥じらいをもって欲しかったジェニーは涙ぐんでしまふ。

ほたるには清らかで可愛い乙女という印象を持っていたのに、その清らかで可愛い乙女を自分の色に染めたかったのに。

まさか、まさか、よりによっていきなり尻を求めて来るとは．．．

「どうしたんですかあ？ はやくくださいよう」

尻を振って誘うほたる。

ぶら下がる小さなペニスがなんとも可愛く、ジェニーは少ししゃぶり突きたい衝動にかられる。

心では少し残念でも身体は正直なもので、ジェニーのペニスは先程よりもずっと固く勃

起している。

「あーん、もうっ．．．私の胸、そんなに気持ちいい？ ほたるう．．．可愛

い．．．」



起し、流れ出る愛液の量も尋常ではないと思わせる程だった。

「いいわ、覚悟しなさいね……この巨根で攻め抜いてあげる」

ジエニーは四つん這いの尻の穴にペニスをあてがい、一気に前へ突き込んだ。

ぶちゆるるうっ……！
精液で濡れたペニスは小さなアヌスを広げながら奥へ奥へと勢力を伸ばす。

「はあううっ……！ー！ー！ー！くう……ん！はふっ……あはっ！ー！ー！

奥まで突然貫かれた快楽にほたるは軽く絶頂を迎え、ペニスから射精してしまう。

どくんっ……びちゃっ……結構な量の射精で床に精液溜まりができ、

ようやくジエニーは満足そうな笑みを浮かべる。

「あらあ、もうチンポがイっちゃったの？まだ入れただけなのに、ダメよあ……まだまだ私のペニスでこね回すんだから☆

いっばい、いっばい☆ お尻もチンポもどーにかなっちやうくうぐいに可愛がってあげ

ちやうわよっ」

ぬぶっ……ずぬぶっ……ずぬぶぶっ……

前後に突き込むだけでなく、回転の動きも

加え、手慣れた腰使いでほたるを犯す。

やっ！と本領発揮だと、傲然やる気は高まる。

「ほら、ほらあ……どう？ いいでしょ、私のペニスは大きくてっ！ 可愛い

声あげてイっちやいなさい☆ ほらほらあっ☆

カリがほたるの肉壁に擦れてお互いの肉が快楽を貪り、肉と肉が引つかかる度に二人は快感による小さな声をあげた。

「はいっ、ジエニーさあ……すこく……おおき……い……ですう……うっ！ はひっ……また、イっちやうう……！ー！ー！ ほたるのおちんちんっ……だめなのっ、おちんちんっ」

びゅばっ……

またほたるは射精し、床の精液溜まりを広げていく。

どぶっ……どぶぶっ……！ー！ー！

「当然よ！ 私のペニスはその辺の娼婦だつて濡れさせるんだから……」

このペニスで落ちなかつた女は居ないわ！ お尻の奥の奥までこのペニスでかき回してあげるわよっ！

ぎゅぶっ……ぎゅぶっ……ぐぶるっ……

容赦無く突き上げるジエニー……部屋中に響く淫靡な音がそれを物語っているだろう。

愛液を吐き出すジエニーのペニスとほたるの尻が、淫靡な楽器となるのだ。

「あはっ……でも、ほたるのお尻も、イイ……わよ……これじゃ

すぐまた出しちゃうかも……きつくてっ……おうっ……すっく……

イイ……」

「んふう……んふうう……じゃ、出して下さい☆」

「え？」

ほたるの一言「ジエニーは一瞬、素に戻っ

ぎゅううう……ぐじゅっ……！ 次の瞬間、突然ほたるの尻の中が収縮し始め、ジエニーのペニスを強烈に締め上げた。

ただ力強く締め上げるだけでなく、肉の硬さと柔らかさをペニスにたつぷりと味合わせ

て快楽でペニスを支配する絶妙な締め上げ方である。

「うはあ……何……これ……すこっ……あうう……はっ……

ああ……」

「如何ですか？ ジエニーさあ……すっ、その表情からすると気持ちいいんです

ね？」

「そんな事無……あはあ……もうダメ、もうダメええっ！ー！

吾術的なまでの肉の収縮には、ジエニーのペニスも降参するしかない。

まだ耐えられると思っていたのだが、彼女

の予想よりも早く絶頂が訪れてしまった。

「あはあ……あ……！ー！ー！ 出るううう……！ー！ー！ 出るっ、射精するっ！ チンポから、精液出すのあっ！

どぶっ……どぶぶっ……！ー！ー！

びゅっ、びゅっ、びゅっ、びゅるっ……

びゅるるるっ……！ー！

「はああ……まだ、とまんないいい……まだ、まだ射精して

るう……！ 射精してるう……チンポがあっ、まだ、まだ射精の準備出来てないのにいっ、出る、出すううんっ！

どくんっ……どくんっ……どくんっ……

ほたるの尻に挿られ、何度も何度も絶頂を迎えてしまおうジエニー。

まるでジエニーの方がほたるの為にペニスで奉仕する奴隷のようである。

「ふああ．．．ジエニーさんの精液がいっぱい流れ込んで来る．．．すっ．．．凄いですう．．．こんなに大きくて、こんなに射精できるなんて．．．ジエニーさんすっ．．．好き、射精する度にジエニーさんが中で膨らんでえ．．．広がっちゃうっ、あはああんっ！」

ジエニーのペニスを絞り上げているほたるも別に感じていないわけではなく、十分に巨根のペニスを堪能しており、前立腺をこね回される事から来る射精を彼女も繰り返していた。

回数と射精量で言えばジエニーの方が遙かに多いが、ほたるのペニスの大きさから考えれば大したものだ。

どぶぶぶ．．．びゅるるっ．．．どぶぶぶ．．．びゅるるっ．．．どぶぶぶ．．．どぶぶぶ．．．どぶぶぶ．．．

熱い精液が直腸に打ち込まれる度に、一緒に広がって行くほたるの精液溜まり。

ほぼ同時に射精する二人は妙な一体感に包まれ、徐々に2つのリズムが1つのリズムに統合されていった

「あうううう、あうっ．．．ふひい．．．チンポお、また、また射精するうっ．．．」

「ジエニーさあ．．．もっとお、もっとおもっとお．．．」

どちらかが倒れるまで続くのではないかと思われた射精も、ジエニーが倒れる事であっけなく終わった。

「だめ．．．もうだめえ．．．だめえ．．．だめえ．．．せいえきい．．．だめえ．．．」

ほたるの方へと倒れた為、ジエニーの身体を支えきれないほたるは自分の射精した精液溜まりに身体を沈め、白い肌がより白く化粧されてしまう。

「あ、私の射精した精液でゼーンぶヌルヌルう．．．ジエニーさあ．．．もう終りですか？」

「だって、ほたるのお尻．．．何度も何度も挿って来るうう．．．気持ち良かったわ．．．私のチンポが気持ちよすぎてるおかしくなっちゃうよお．．．」

しばらく2人は精液溜まりで精液をローション代わりに身体を擦り合わせていたが、次第にまたジエニーのペニスが固くなりはじめたのを見てほたるはそのペニスを握んだ。

「あ．．．握っちゃう．．．あう．．．握ると尿道が圧迫され、また入り口からは精液が漏れ出る。」

「ジエニーさん、まだすっく元気じゃないですかあ．．．こんなに勃起して、精液でドロドロになつて．．．もう．．．また挿っていいですか？」

「ふ、ふえ．．．もう精液でないよお．．．」

「嘘！ そんな事ないですよ、このおちんちん、もっともっと射精したいって言ってますよ．．．くすっ☆ 入り口がバクバクしてて、可愛い．．．☆」

可愛く微笑むほたる。

やはり天使の微笑みというのがピッタリなこんな笑顔を見せてはジエニーも逆らえず、ほたるの為ならなんでもしてあげようという気持ちで湧いてきてしまふ

「ジエニーさんは寝たままの体勢でいいですよ、私が動きまますから．．．」

ほたるはジエニーを仰向けに寝かせ、天井に向かって直立したペニスの上に立ち、ゆっくりと腰を落とす。

「はあ．．．おまんこの奥の奥まで入って．．．おっきい．．．」

巨根を完全にくわえ込んだほたるはゆっくりと腰を上下に振り始める。

両手はジエニーの両胸をしっかりと掴み、強く挿るように揉みだしている。

「きゆうんっ！ おまんこ気持ちいいよお．．．ジエニーさんのペニスって大きくて形もよくて、ステキですう．．．」

「きゆうん．．．くうん」

粘液と肉が激しく擦れ合う音が部屋中に響き、ジエニーは最早夢見心地で自分から快楽を貪り取る天使を虚ろな瞳で見つめていた。

「はああう．．．ほたる、ほたりゅう．．．」

「ジエニーさあ．．．ジエニーさあ．．．んっ．．．」

「じゅぶっ、じゅぶっ、じゅぶっ．．．騎乗位で激しく交わるほたるとジエニーはお互いの名前を呼び合い、見つめ合う。

「ジエニーさあ、私のおちんちん、射精し足りないんですっ．．．お願いします、ジエ



こんにちはCERAMIC HEARTのはやさかうたねです
今回はほたりゅん&じえにじえにのラブラブふたなり小説を書かせて頂きましたが、
楽しんで頂けたでしょうか？
ジェニーが結構可愛く書けたかなとか思いますです、みゆ。

下の絵はジェニーですの、似てないけど。
ほぼうたねの自画像です、ええ。 まじで。

目次とかのデザインもさせて頂きましたです、なんかオシャレ狙って成功したやら
失敗したやら～



The background features a vertical split. The left side is red with a black and white digital pattern. The right side shows an anime-style illustration of two characters. The top character is a girl with dark, wavy hair, large eyes, and a green scarf. The bottom character is a boy with blonde hair, looking thoughtful with his hand to his chin. The text 'Harth Nir' is written in a stylized, white, gothic font with a brown outline, set within a dark, cloud-like shape. Below it, 'since 1999' is written in a smaller, white, sans-serif font. The website address 'www.harthnir.com' is written in a white, sans-serif font with a red outline. In the bottom left corner, there is a large, black, stylized character that resembles the Japanese character '天' (Heaven).

Harth Nir

since 1999

www.harthnir.com

天